

毎月1回20日発行

(昭和31年3月28日第三種郵便物認可)

やま博物館

編集責任者 大町山岳博物館

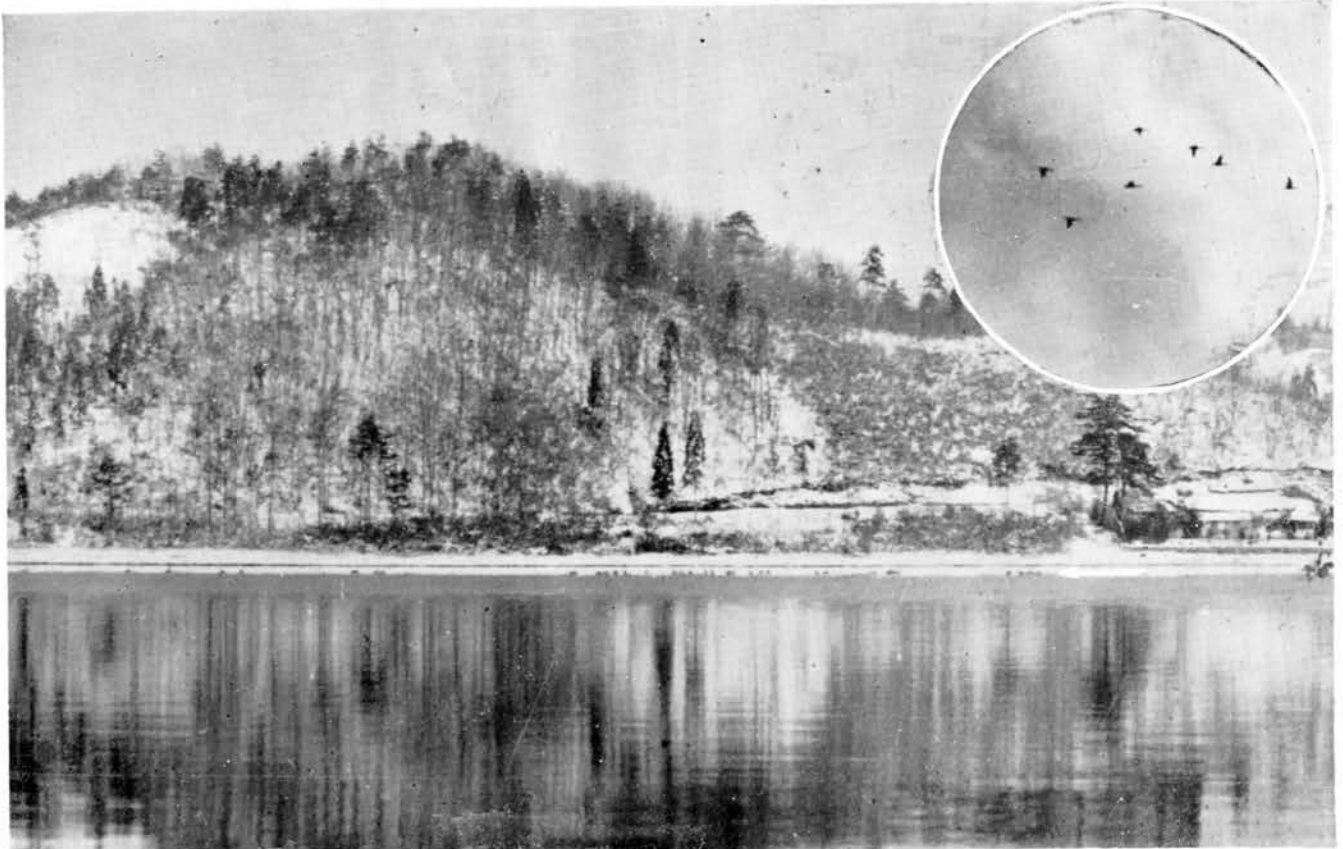


にほんざる
Macaca fuscata (Blyth)

本館のモン吉君。今年11才。サルとしては働き盛りであるが、現在ヤモメ暮らし。右眼じりのコブに猿生(?)の無常を秘めた味のある顔である。とにかく半生を生きてきたということが彼の現在の顔を創ったのだ。サル年去るに、当り彼も何をか想っていることだろう。

NO. 12 1956年12月20日

大町山岳博物館後援会 発行



仁科三湖には各種のカモ類が渡ってくる。その代表的なものがマガモとカルカモである。彼等は夕方から朝にかけて活動し、日中は人里から離れた湖の安全な場所で眠っており、危険を感じない限り飛び立たない。(写真は青木湖に浮かぶマガモの群。円内は湖上を飛ぶカルカモ)

カモを探る

水禽舎と仁科三湖から



カルカモのたまごとひな

10月の声を聞くと仁科三湖にはカモ類の訪れが見られる。マガモ、カルガモ、コガモ、トモエガモ、オシドリ(以上陸ガモ)ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホホジロガモ(以上海ガモ)などである。多い時には三湖で総数700羽も数えることができ、三湖中最も静かな青木湖に多い。青木湖は絶対的にマガモによって占られ、木崎湖においてはカルカモの数がマガモの数をしのぐのが普通である。

カモ類はそれぞれ季節的な消長を示し、カルガモ、マガモは冬期にいちじらしい群衆を作り、トモエガモ、コガモは稀である。オシドリは当地方の河川の畔、樹林内に巣が見られるが仁科三湖では殆んど見られない。キンクロハジロ、ホシハジロは旅鳥であり、ホホジロガモ、スズガモもやはり稀である。全般に冬期に最大の群を示し、夏期には減少する。陸ガモ類は水面で餌をあさり、夜間に田畑へ出かけ、植物の種子など食べる。昼間は視野の広い水上を安息の場として、波にまかせている。潜水はしない。海ガモ類はたえず(湖の中央をさけ)浅瀬に寄り、本能的な潜水を行ない、水底の動植物を主食としている。陸ガモは主として内陸の水原に多く、海ガモは海灣や、潟に多い特徴をもつ。又更に習性上おもしろいことは陸ガモのまいたちは、グワア、グワアと鳴きヘリコプター式であり、海ガモは重機式で滑走が長いことである。

一例にカルカモの生活を調べてみよう。全国各地の水辺の草原にすむ一般的なカモである。夏季は雌雄で生活し、冬季には一対づつが

集まって大群衆をなしている。水辺の草原に植物を材料として巣をつくり、4月~7月頃に10~12ヶの卵をうむ。ひなは26日位でふ化し、直後田んぼにおよぎ出し、農夫にとらえられることがある。ここで昔から伝わる赤犬猟を紹介しよう。この方法は、赤犬に池の堤を歩かせ、飼主は物かげにかくれ、合図やえさで、犬を左右に歩かせたり、池の縁まで近づけたりする。すると池のマガモやコガモはこの犬に向かって近づき、犬の行動にあやつられて、カモが思うよう行動する。ここで犬を手まねきで呼びよせ、タカ匠がタカを放つか、あるいは猟銃で打つわけである。この場合犬飼は最も目立たぬ服装で、犬にも人間の臭をなくす位の注意が必要だそうである。

〔仁科三湖のカモ類の生態については信州大学講師羽田健三氏の研究(昭和27年5月報告)によるものである〕

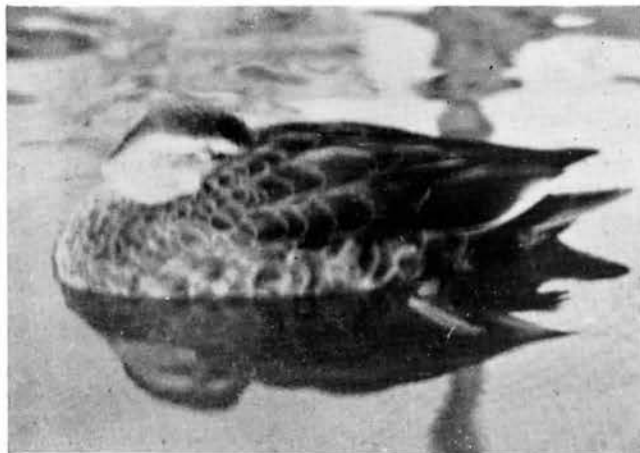


ふ化して間もないカルカモのひな。体の下直の各羽には淡褐色の巾の広い羽縁があり、全体として暗褐色に淡褐色の縦のまだらがある

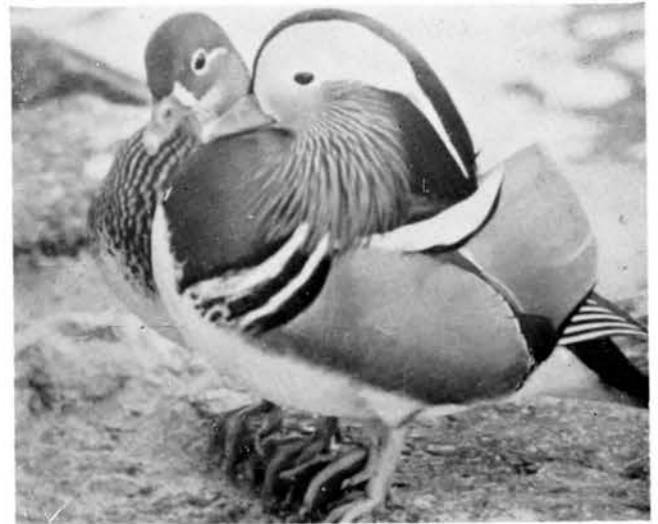
彼らの生活を水禽舎（本館野外施設）の中でみよう。面積二三平方
米、水上面積八平方米、陸上面積一五平方米、水深七〇釐。舎内
はオオハクチョウ（雄一）マガモ（雌一）ホシハジロ（雄三）トモ
エガモ（雄一雌一）カルカモ（雄三雌二）オンドリ（雄一雌一）が
いる。給餌は一日二回、配合飼料、野菜類、生魚、昆虫などを与え
ている。観覧者の多い彼らはすでに人間を意識しなくなっている。



彼らの中のボスは何といてもオオハクチョウ。カモの世界にも、えさを食べる時や、カモ同志のつき合いにそれぞれの優劣の順位を示す。尾の近くにある尾脂腺より分泌される脂を、口の先につけ羽をみがく時に、写真のように水面にきれいな波紋を描くのが時々見られる。羽の水ぎれをよくするためにある。彼らは非常に警戒心が強い静かにねむっている時でも、空飛ぶ彼らの敵、タカ類に注目し、騒ぎ出す。又水辺にねむるのもその一例である。



暖かい光をあびて羽の中に首を入れ水上がねむっているカルカモ。彼らの水上での生活時間はほぼ三時間である。ねむる時でも水上でねむるもの、陸上でねむるもの、陸上でも片足で立ってねむる、岩の上にすわってねむるなど思い思いの形でねむっている。平均睡眠時間は五〜七時間位で、早朝と夕刻から夜遅くまで活動する。



写真上は仲の良いオンドリ夫妻。雄の羽の色はスプラック美しい。下は型は小さいがスパンロイ、オンドリと共に仲の良いトモエガモ



東の空が白みはじめる頃、彼らは活動をはじめる。ホシハジロはさかんに潜水をし、カルカモは声高く鳴き水禽舎の中を飛びまわる。夜明が彼らの活動のはじまりなのである。そしてたん念に羽の手入れする頃が、陽のぼってくる。11月頃になると彼らにさかんに水上、陸上で羽ばたきを始める。あたり一面水を飛びあらし、めかしているのであるところせましとばかり運動を始め、羽ばたき、遊泳、つきあひが行われるがホシハジロは一番劣位である。

郷土の民芸品



スツベンジヨウ、ワラグツ、ゴンゾとも呼ばれ長靴の前身である。古くから全国各地の山村で使用されている一般的な雪具である。積雪の多い雪道に利用され、暖かで軽く足まわりがよい。しかし融雪時には水が入るからあまり使用されない

が、厳寒時の使用は今も盛である。アルプス下ろしの寒風が吹きすさび、比較的冬の長い北安地方では、農家の副業に土産として、写真のようなかわいらしいスツベンジヨウが作られている。大ききは高さ7cm、足巾8、3×8cm。

冬山シーズン開く

いよいよ冬山シーズンだ。各大学山岳部、山岳団体は冬山準備に最後の追い込みである。例年に比較して相当量の積雪、天候不順が予想され、充実した計画により、地元の遭難防止に登山者の協力が望まれている。やはり今年も北アルプス冬山の雄、鹿島、穂高、北鎌尾根にいどむが早大、立大では北海道に入る計画である。年末年始から春にかけて北アルプスにいどむ団体は福岡山の会、同山岳会、八幡製鉄山岳部、東京アルコウ会、東京城崎カメラ会、経済大学山岳部、大阪山徒クラブ、関西学院、同志社大、京大、東大、法大、明大、慶大、早大等の各山岳部である。大学では新入養成で極地法登山、集中登山でいどむ傾向。

【写真は冬の鹿島嶺】



【動物園だより】 オオアカゲラ

あたりの静けさを破ってキョ、キョと鋭く鳴きながら、樹木をたぐり中の虫を取って食べているこの鳥は、体色が黒、白、赤の3色からできており、樹木に垂直に止る特徴があります。大町地方では1年中何処でもみられるキツツキの代表種で、正面からみると奴の顔にており、人を見ると一寸頭を傾げキョロ、キョロする動作は全くこっけいで、また可愛らしく感じますが1分間に何百回と樹木をたぐり、大きな穴をあけるため造林上の害鳥とされています。写真は、大町市伊藤場介さんの寄贈で、大変よく人に馴れています。



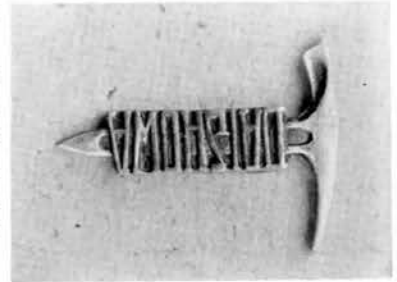
お知らせ 本紙の購読を御希望の方には実費 1部10円でおわけします。但し遠方の方は郵送料の実費をいただきます 大町山岳博物館後援会

山 岳 会

—大昭和製紙山岳部—

静岡県吉原市今井133

設立は昭和30年4月1日。昭和28年秋有志の者が集り社内文化祭に山岳写真展を開いたところ、意外な共鳴を呼びこれらの山岳写真愛好者をつのり山岳部を結成し30年4月より正式に交友会体育部に承認された。わたしどもは、アルプスのふもとにある貴館が山岳事故、遭難防止のためにもある期間(一週間位)登山技術講習会をひらきわかき山岳指導者を養成したらと思っております。パッチはピツケルにローマ字で社名を配したもので有田裕氏の作。



博物館後援会員募集

博物館後援会の会員を募集しています。年額千円を納める団体ならびに、年額三百円以上を納める個人を正会員といたします。会員には次のような特典があります。

- 1、博物館の諸指導行事を通知し参加の便をはかる。
- 2、毎月ミヤまと博物館ミを配布する。
- 3、団体には講師、指導者派遣の求めに応じる。
- 4、博物館に支障のない限り、博物館の資料(標本、図書、写真、図版等)器具の借出しをあっせんする。
- 5、その他博物館で種名同定、研究指導など諸種の便宜をうけるあっせんをする。
- 6、いつでも博物館を無料で観覧できる。

【博物館だより】 11月20—24日南小谷小学大出張展 22日鳥類剥製完成標本受入、27日水産類24時間観察、12月1日新館、附属動物園計画、2日カモシカ撮影(高瀬溪谷) 9日山の歌声(公民館)、協議会(事務室)、居谷里哺乳類調査、10日居谷里鳥類24時間観察、12—15日神奈川、東京都内博物館視察

(今月の寄贈) イシガメ1体 大町市若宮町林田正 タシギ1体、大町市野口吉沢貞治 クイナ1体、大町市平海ノロ平林保 ホシガラス1体、大町市常盤須沼等々渡 オオミズナギドリ1体、東筑波田村清水保寿 ヤマネ1体、大町営林署白原久 ミソサザイ1体、大町営林署 オンドリ1体、池田町三丁目松田政敏 ヒツクイナ1体 大町市六日町安藤敏行、

編集後記 連日の雪降りだ本館を訪れるお客さんもめっきり減って、山麓の冬ごもりがはじまった。▲「百姓もやと暇になった。何かやらなくちや。」といって農家のおじさんが民芸品創作クラブの相談に来てくれた。ありがたいことだと思ふ。▲新館の工事もおとわずかで完了し、マシラの如くかけ廻ってサル年も去っていく。来年こそ皆に親しまれる博物館にしようと思ふ。▲暮から三月まで北アルプスの山麓はスキーヤーと冬鳥のパラダイスとなる。本号は冬の活躍者カモをとり上げてみた。良いトリ年の来を願うつつ。

やまと博物館	No.12	1956.12.20発行
編集発行人	大町山岳博物館	
発行所	大町山岳博物館後援会	
	長野県大町市神楽町電話211番	
印刷所	信州印刷株式会社	